

リレー随筆

古来の月に想いを馳せる

鹿児島大学病院 研修医 | 木原 千佳

はじめまして。江口先生よりリレー随筆のバトンを受け取りました、木原千佳と申します。現在、初期研修医として鹿児島大学病院に勤務しております。この度は貴重な機会をいただきありがとうございます。

今回の随筆は、月の話をさせていただきます。

この話のきっかけは、私が今回リレー随筆のお話をいただいた夜でした。その夜は天気が良く、ゆったりと夏の桜ヶ丘を下っていました。丘の中腹、家々がパッと開け桜島が泰然自若と聳え立つ横に、そっと月が浮かんでいました。真ん丸な満月より少し細身な月でありましたが、妙に目が離せません。満月のように完全な姿でもなく、三日月や上弦の月のように特徴的でもない、そんな曖昧な不完全さに目を奪われたのでしょうか。動くこともできず立ち止まっていると、突然、林から蟬の合唱が始まり、自身の服が汗でぐっしょりと濡れていることに気がつき、早くお風呂に入ろうとその場を後にしましたが、あの月が頭から離れることはありませんでした。

あの月は一体何だったのか、その疑問は現代文明の申し子、Web検索が解消してくれました。あの月の名は「十三夜月」。十三夜月は旧暦13日の月のことを指します。

旧暦とは月の満ち欠けなどを用いる暦です。旧暦は、毎月新月から数え始めます。新月から数えて、14日目～17日目が満月です。十五夜は新月から数えて15日目なので満月、もしくは満月に近い月、十三夜は新月から数えて13日目なので、満月に

は少し欠ける月です。

毎月昇る十三夜月の中でも旧暦9月13日の十三夜月は特別で、昔からこの日に月見を楽しむ習わしがあります。旧暦8月15日に行われる十五夜の月見では豊作を願いながら月を愛でますが、十三夜は稲作の収穫を終えている地域も多いことから、秋の収穫に感謝して月見を行います。十五夜の月見は中国から伝わった風習ですが、十三夜の月見は日本で生まれました。

十三夜の月見の始まりについては、諸説あります。代表的な説が、平安時代に書かれた「躬恒集(みつねしゅう)」の、延喜19年(西暦919年)9月13日に醍醐天皇が月見の宴を催し詩歌を楽しんだという記述で、これが十三夜の月見の始まりと考えられています。また、平安時代後期の「中右記」には、長承四年(西暦1135年)9月13日の月見の宴で、寛平法皇(出家後の宇多天皇)が「今夜の名月は並ぶものがないほど優れている」という内容の詩を詠んだという記述があり、ここから十三夜は十五夜の次に美しいとされています。昔の人も私のように、満月のように完全ではなく、三日月や上弦の月のように特徴的でもない、そんな不完全さに心を奪われたのでしょうか。

十三夜の月見は日本の気候に合わせて生まれたという考えもあります。十五夜の月見が行われる旧暦8月15日頃の日本は、長雨や台風の季節で、月が雲に隠れ見えなくなってしまうことがよくあります。そこで一月ほど遅らせ、晴れることの多い旧暦

9月13日を十三夜とし、月を見る習わしができたというものです。

このように十三夜は十五夜と並ぶほど大切であるとされており、どちらか一方しか見ないことを「片月見（かたつきみ）」と呼び、縁起が悪いとされていました。

昔の人にとって十五夜に並ぶほど大切であった十三夜月には他の呼び名が多くあります。旧暦8月15日の十五夜の月見につづく月ということから、「後（のち）の月」。旧暦9月13日の頃に収穫される粟や豆から「粟名月（くりめいげつ）、豆名月（まめめいげつ）」。ちなみに旧暦8月15日の十五夜の月はその季節に芋が収穫されることから「芋名月（いもめいげつ）」と呼ばれます。なんだかお腹が空いてくる呼び名です。他に、十五夜と十三夜を合わせて「二夜の月（ふたよのつき）」。旧暦9月と10月の間に「閏9月」がある年には、十五夜と十三夜が2回訪れ、2回目を「後の十五夜」「後の十三夜」と呼びます。閏月とは、月の満ち欠けなどを用いる旧暦と太陽暦の1年とのずれを補うために入れられる月のことです。美しい月を何度も見られ、月見を何度も行えるのはとても楽しそうです。

十三夜月についてここまで調べた私は好奇心の赴くままに探究し、月の満ち欠けに合わせてそれぞれ呼び名があることも知りました。

旧暦1日の月から「新月」、「二日月（ふつかづき）」、「三日月」、「上弦の月」、「十三夜」、「小望月（こもちづき）」、「十五夜」、「十六夜（いざよい）」、「立待月（たちまちづき）」、「居待月（いまちづき）」、「寝待月（ねまちづき）」、「更待月（ふけまちづき）」、「下弦の月」、「有明の月」、「晦（つごもり）」と名が付いています。

「新月」は月（旧暦）の始まりの月です。月の光がないため、星の観察に適した日でもあります。

「二日月（ふつかづき）」は日が沈んだあとに浮かぶ、糸のように見えることがある細い月。旧暦2日の月で、「織月（せんげつ）」とも呼ばれます。

「三日月」は旧暦3日の月で、細く輝く姿から「月の剣」とも呼ばれます。フランス語では *croissant* と言い、パンの一種であるクロワッサンの名前の由来にもなっています。

「上弦の月」は、その姿を弓に張った弦（つる）になぞらえ、弦月（げんげつ）や弓張月（ゆみはりづき）とも呼ばれます。他にも、上の弓張り（かみのゆみはり）、玉鉤（ぎょっこう）など多くの呼び名があります。ちなみに玉鉤は、古代中国で儀式が行われた際、革帯をとめた鉤のことです。上弦の月はクレーターがととてもはっきりと見えるので、望遠鏡などで観察するのも楽しい月です。

「小望月（こもちづき）」は旧暦14日の月です。十五夜への期待をふくらませ、前夜の月に名前を付け、愛でていたようです。

「十五夜（満月、望月）」は旧暦15日の月で、最も美しいとされる月です。丸という完璧な姿から心を奪われる人が後を絶たないのでしょうか。十五夜の月は「中秋の名月」とも呼ばれます。旧暦の秋にあたる7月、8月、9月の真ん中の月である8月は、ちょうど秋の真ん中にあたるため、「中秋」と呼ばれます。ススキや秋の七草を飾り、月見だんごや収穫された里芋をそなえ、月見を楽しみます。

「十六夜（いざよい）」は旧暦16日の月です。いざよいとは、ためらう・進めないという意味の「いざよう」が名詞化したものです。月の出が遅くなり、十六夜は十五夜の月よりもためらっているように見えたため「いざよい」と呼ばれたと言われています。

「立待月（たちまちづき）」は旧暦17日の月です。「今か今かと立って待つうちに

月が出る」と言われたことから名付けられました。

「居待月（いまちづき）」は旧暦18日の月です。月が出るのを居間などに座って待つという意味が込められています。

「寝待月（ねまちづき）」は旧暦19日の月です。月の出が遅く、寝て待つほど遅いという意味から名付けられており、別名「臥待月（ふしまちづき）」とも呼ばれます。

「更待月（ふけまちづき）」は旧暦20日の月です。月の出が遅く、夜更けまで待つてようやく出てくるため、この名が付けられたとされています。

読者の皆様はお気づきかもしれませんが、十五夜の月以降、十六夜月（いざよいづき）、立待月（たちまちづき）、居待月（いまちづき）、寝待月（ねまちづき）、更待月（ふけまちづき）と1日ごとに月に名前が付けられています。これは、街灯のない時代、昔の人たちが日が暮れて真っ暗になった後、月が出るのを今か今かと心待ちにしていたからと思われまます。きっと、今よりももっと、月明かりを恋しく思っていたのでしょう。

「下弦の月」の弦（つる）というのは弓に張る糸のことで、半月の形が弓に似ていることから、弓の真っ直ぐな部分である「弦」の漢字が用いられたと言われています。上弦と下弦の名前の由来は諸説ありますが、代表的なものは下記の2つです。1つ目は、旧暦を使っていた時代に、月の前半（上旬）の月を上弦の月、月の後半（下旬）の月を下弦の月と呼んだところから来ているという説です。2つ目は、西の地平線に沈む時に、弦が上に位置しているか、下に位置しているかで名付けられたという説です。下弦の月は直線部が下で、半円部が上の状態で沈んでいきます。このため弦の部分が上で沈む月を上弦の月、弦の部分が下で沈む月を下弦の月と呼んだと言われています。

「有明の月」は旧暦15～29日までの月を指します。「夜が明けても、まだ空に有る月」であることからこの名が付いたとされています。

「晦（つごもり）」は月（旧暦）の最終日の月です。

これまで月の名称についてお話しさせていただきました。夜な夜な現れる地球唯一の衛星をより身近に、より面白く感じてもらえんと思います。

この随筆が掲載される10月は旧暦9月に相当します。そこで読者の皆様には是非十三夜の月見を楽しんでいただきたいと思ひます。旧暦9月13日は10月15日（火）です。月見団子や栗、豆など季節の食べ物を用意するもよし、カメラで写真に撮り記録に残すもよし、帰り際にちらりと見るもよし、皆様それぞれの月見をお楽しみいただければ幸いです。

次号は、鹿児島大学病院／嘉川 颯太先生のご執筆です。
（編集委員会）